

Title	シスモンディにおける無形資本の概念について：信用論の一側面
Sub Title	Du concept du capital immatériel chez Sismondi
Author	中宮, 光隆
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.6 (1978. 12) ,p.983(71)- 992(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19781201-0071
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781201-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シスモンディにおける無形資本の概念について

—信用論の一側面—

中 宮 光 隆

目 次

はじめに

第1節 『商業的富について』における無形資本の概念

第2節 『経済学研究』における無形資本の概念

小 括

はじめに

本稿の課題は、シスモンディの信用論においてひとつの基軸をなす無形資本の概念を考察することにある。彼の信用論のなかでとくに銀行信用を中心に扱った前稿⁽¹⁾では、彼の信用論が、一面では貨幣と資本を明確に区別するという点でスミスの限界を超えていながら、他面ではそれを再生産過程との関連において把握することができずにスミスの積極面でもある資本の節約＝再生産の拡大という点を看過してしまったこと、しかしそれによってむしろ銀行信用の枠から出たいわば資本市場を彼の信用論の中に取り込むという積極面もっていることが示された。本稿で考察される無形資本は、そのような資本市場の存在を背景に、そこでシスモンディが捉えた資本の一形態なのである。この意味で、彼の無形資本に関する叙述は、彼の信用論の展開

において重要かつ不可欠な地位にあるのであって、無形資本の解明なくして彼の信用論を理解することは不可能だといっても過言ではないと思われる。⁽²⁾

そればかりではない。すでに指摘されているように、マルクスの擬制資本の概念は、シスモンディの想像的資本の概念を「発展さ」せたものであるが、この想像的資本は、シスモンディにおいて無形資本の一特殊形態と捉えられているのである。すなわちマルクスの擬制資本の概念の源泉がシスモンディの無形資本の概念にあるのであって、後者は、マルクスの信用論との関係という学説史上の観点からも、重要な意味をもっているといえるのである。⁽³⁾

もっとも、シスモンディは、無形資本についてシスモンディの経済学に関する主要な三著作のうち最初の『商業的富について』(De la Richesse Commerciale ou Principes d'Economie Politique, appliqués à la Législation du Commerce, 1803.) と最後の『経済学研究』(Etudes sur l'Economie Politique, Tome premier 1837, Tome deuxième 1838.) では論述しているが、最も著名な『経済学新原理』(Nouveaux Principes d'Économie Politique, ou de la Richesse dans ses Rapports avec la Population, 1819, 2^{ed.} 1827. 邦訳、山口茂、菅間正朔共訳『政治経済学新原理』1942, [上巻のみ]。菅間訳『経済学新原理』1949-50.) ではほとんどふれていない。そのう

注(1) 拙稿「シスモンディの信用論——銀行信用を中心として——」(『三田学会雑誌』第71巻5号, 1978年10月)。

(2) アモンは、その著『国民経済学者としてのシモンド・ド・シスモンディ』でシスモンディの『商業的富について』と『経済学新原理』を扱っているが、前者では本稿が対象とする無形資本に関する章を「信用論」として解説している。(Alfred Amon, *Simonde de Sismondi als Nationalökonom, Darstellung seiner Leben mit einer Einführung und Erläuterungen*, 1945-49)。

(3) 小竹豊治「擬制資本」(『体系証券辞典』, 1971, 8ページ。同『証券経済論——擬制資本論要綱——』8ページ)。なお Marx, *Das Kapital*, Bd. III, *Marx-Engels-Werke*, Bd. 25, ss. 493-94. 邦訳『資本論』, マルクス=エンゲルス全集, 第25巻第2分冊, 609-10ページ参照。

(4) シスモンディとマルクスの信用論における共通性は、たんにマルクスが資本還元を論述する際にシスモンディの想像的資本に関する記述を引用したという点にとどまらず、とくに公債論では両者に多くの類似点が見られる。

え、『商業的富について』と『経済学研究』とは、無形資本の捉え方がかなり異なっている。一方、シスモンディが想像的資本の概念を展開したのは、『経済学新原理』以降であり、それ以前の『商業的富について』では、それは殆ど論じられていない。さらに『経済学新原理』においてさえ、想像的資本の概念は、国債との関係で簡単に述べられている程度にすぎない。その概念が本格的に展開されるのは、それが資本還元結びつけられて論述された晩年の『経済学研究』においてである。だから想像的資本という概念の把握は、シスモンディにとって、無形資本にたいする考え方の変遷の過程を通じてしだいに可能となったといえるだろう。このことは、後述の如くシスモンディが、初期においては信用は富の移転にすぎないと考えていたのにたいして、晩年には極めて限定されているとはいえ、信用の創造可能性を認めるようになったことと符合する。そこには、19世紀前半のフランスにおける資本制生産と信用制度の発展とともに、初期のスミスの祖述から、『経済学新原理』以降独自の説を展開するにいたったシスモンディ自身における理論上の発展も見い出されるように思われる。

このような観点から、本稿の第1節では『商業的富』における無形資本に関する叙述を、第2節では『経済学研究』における想像的資本の概念を含む無形資本に関する叙述を整理し、両者の異同の検討を通じて、シスモンディの無形資本の概念を考察したい。

第1節 『商業的富について』における 無形資本の概念

シスモンディは、経済学の最初のまとまった著作である『商業的富について』の巻末で、「この著作で用い

られている学術用語の定義」と題する後書を書き、その中で無形資本を次の如く規定している。

「無形資本 資本家が持っている国富のうち、その富が有価証券の中に隠されている部分。それは、前もってすでに交換して与えられた、労働の果実から切り離された、新たな労働を強要する権利である。結局それは、物質的資本 (capital matériel) の収入の分配を受ける権利である⁽⁵⁾」。

また、本節で取り扱う同書第1編第6章の表題に付けた注で、シスモンディは、次のように述べている。

「私は、無形資本という名称を、その全財産が紙ばさみの中にある資本家が持っている、国富の中の一部に付すべきだと考えている。資本家によってその占有権が移転された貨幣は、その標章であり、彼らが自分の手中で保持している債権の証書は担保であるが、その占有権自体は無形である。あるいはむしろ、それは、他人が所持者である固形の富への参加権にすぎない⁽⁶⁾」。

すなわち、シスモンディのいう無形資本とは、生産資本や商品資本といった実在する「堅い」資本ではなく、そのような物質的な資本、とくに貨幣資本の貸付けによって貸し手に生じる利子請求権、新たな労働によって作り出される労働生産物の分配を受ける権利である。それが目に見える姿をとるのは、せいぜい各種有価証券の形態においてである。したがって、シスモンディは、無形資本を債権 (créances) とも表現している⁽⁷⁾。

さて、『商業的富について』においてシスモンディが指摘する債権すなわち無形資本の特徴は、次の3点に要約される。すなわち、第1に、債権つまり無形資本は、紙券貨幣 (papier monnaie) とは性質を異にするという点、第2に、無形資本は、一方では利子をも

注(5) Sismondi, *De la Richesse Commercial* (1803), tome. I, p. 346.

(6) *ibid.*, p. 158.

(7) シスモンディは、無形資本と債権という二種のタームをほぼ同一の意味で使っている。本稿第1節で対象としている『商業的富について』第1編第6章の表題自体が「無形資本すなわち債権について」となっているし、たとえば「債権の所有権、すなわち無形資本部分の所有権」(*ibid.*, p. 159)の如く両者を言い換えている部分が多い。あえて用例を区別するならば、「無形資本の存在は、動産の富を構成する資本の本性に関する考えを混同させるのに貢献した」(*ibid.*, p. 159)のように、実在する資本に対立する資本として捉える場合には無形資本という用語が用いられ、「全世界の全債権者が、同時に彼らの債権を通貨で返済するよう要求したら、いったいどうなるのだろうか?」(*ibid.*, p. 164)の如く債権債務関係として、権利として捉えた場合には債権という用語が用いられているようにみえる。しかし、必ずしも両者は明瞭に区別されているわけではない。

ところでシスモンディは、本稿第2節で取り上げる晩年の著作『経済学研究』においても、無形資本と債権をほぼ同じ意味で使っている。『経済学研究』の第2編第17論文の表題は、前述の『商業的富について』と同様に「無形資本すなわち債権について」となっている。

たらずという肯定的な量であるとともに、他方では債務という否定的な量でもあり、正負両面を持っているという点、第3に、したがって無形資本は、一国全体としてみればその国の富に何も付加しない、すなわち創造的ではないという点である。さらに第1の特徴点である無形資本と紙券貨幣の相違の根拠として、シスモンディは、次の3点を挙げている。その第1は無形資本の通貨および紙券貨幣と通貨の量的関係についてであり、第2は無形資本の利子生み資本としての性格について、第3は移転の際の運動形態についてである。

第1にシスモンディは、資本家の富を構成する紙券類を二組に分類することが重要だと主張する。ひとつは、紙券貨幣である。これには、イングランド銀行やその他の銀行の銀行券に加えてアッソニア紙幣を、すなわち兌換か不換かを問わずすべての銀行券から国家紙幣まで含まれている。第2のグループは通貨以外のすべての有価証券、すなわち不動産抵当債権 (les créances portant hypothèque) や預金証書 (les billets de dépôt), それに大商人の当座勘定 (les comptes courants) などである。シスモンディは、前者を貨幣の一部分、後者を動産の富の一部分と規定し、両者はまったく異質なものであるから明確に区別されるべきだとして、その根拠として次の3点をあげている。すなわち第1に、一方で紙券通貨は流通手段あるいは支払手段として機能し、新たに発行された紙券通貨はすでに存在する通貨に付加され、他方で「紙券貨幣プラス旧来の通貨は紙券貨幣の発行以前に通貨だけで持っていた価値よりも多くの価値を持っているわけではない⁽⁸⁾」、換言すれば実現されるべき商品価格総額は紙券貨幣発行の前後で同一だから、「紙券貨幣〔の発行〕は、新たな一塊の金属铸貨の導入と同じ結果を生じるにちがいない⁽⁹⁾」し、「したがって、金铸貨や銀铸貨の輸出が絶対に必要になるにちがいない⁽¹⁰⁾」。これに対して無形資本は、流通部面にあっても通貨の代理をしないし通貨の過剰を発生させることもない。むしろ無形資本は、流通の際にその媒介手段(流通手段)として

の通貨を必要とするのである。無形資本と紙券通貨を異質なものとする第2の根拠は、後者は金庫で眠っている銀貨と同様にその所持者には何ももたらさないし、したがって人々はそれを早く手放そうとするのに対して、前者はその所持者に利子をもたらし、あるいは割引きによって期間に応じた割戻しを得させるので、人々はしばしばそれが返済されるまで手元にそれを保持しようとするという点にある。さらに第3の根拠は、「人々は、まさに他のすべての商品と同様に、つねに銀貨や紙券貨幣と交換に債権を創造し、移転し、販売し、購買する⁽¹¹⁾」という点にある。つまり債権すなわち無形資本は、他の諸商品と同様に通貨と交換される対象であって、流通水路を通貨とともに同じ方向に進行するのではないのである。

ところでシスモンディは、無形資本と紙券通貨を含む通貨一般との相違を強調している。その論拠は、「大英帝国の通貨は、1,800万ないし2,500万スターリングと見積もられている。そして今日、5億3,800万スターリングに達した負債は、通貨の価値の少なくとも20倍を越えている⁽¹²⁾」という論述にみられる如く、両者の量的比較にある。しかし、シスモンディのこの主張は、やや説得力に欠けると言わざるを得ない。もっとも、シスモンディの力点は、通貨と無形資本の量的比較にあったのではなく、両者の異質性の主張にあったのである。

次にシスモンディは、無形資本が資本家個人にとっては利子をもたらず資本としてその所有する富の一部を形成することは認めるが、一国全体としてみれば無形資本はその国の資本の一部とはならないと主張する。なぜならば、「無形の富は、つねに動産の富の何らかの所持者の手中に存在する否定的な量……を伴っているからである⁽¹³⁾」。つまり、シスモンディによれば、無形資本は、物質的な富としての貨幣資本の占有権の譲渡すなわち貸し付けによって、その貸し手に生じた利子請求権である。ところが逆に借り手は、これによって貸し手に利子を支払うという債務を負うのであり、兩

注(8) Sismondi, *De la Richesse Commercial* (1903), t. I, p. 172.

(9) *ibid.*, pp. 171-172.

(10) *ibid.*, p. 172. 国内で紙券貨幣が発行されると、余分な金銀铸貨が外国に輸出されるという考え方は、シスモンディがスミスから継承した命題のひとつである。(Smith, *The Wealth of Nations*, ed. Cannan I. p. 277. 大内兵衛、松川七郎訳、『諸国民の富』、岩波文庫、第二分冊、264-265ページ)

(11) Sismondi, *op. cit.*, p. 170.

(12) *ibid.*, p. 164.

(13) *ibid.*, pp. 177-178.

後の収入のうち利子相当分は、貸し手に帰属するのである。このことは、借り入れ額に対応する負の富(または資本)が借り手に存在すると考えることを可能にする。これら債権債務は、たがいに相殺される。残ったものは、占有権が移転されたという以外に何も変化がない当初の貨幣資本だけである。

この議論の前提には、シスモンディの次のような認識がある。「生産的労働を維持するために為された借り入れは、国を貧しくもしないし、また豊かにもしない。所有者も用途も変更しないで管理人を替えるのは、動産の富の一部である。……しかし不生産的労働を維持するために為された借り入れは、担保のための不動産を抵当にする浪費家によるものであろうと国家の収入を抵当にする政府によるものであろうと、国家に対しては同様に災厄である。今日まで有用労働の活用で充てるべく予定されてきた資金は、還付なしに消費される⁽¹⁴⁾」。借り入れられた資金は、生産的に使用されればその額を回収することができるが、不生産的に浪費されてしまえば、国富にとってはその分を減少させるマイナス要因となるのである。この考え方は、借り手は利子付きで貸し付けられる資財を資本として使うこともできるし、あるいはそれを直接の消費のために留保される資財として使うこともでき、前者の場合には借り手は資本の回収と利子の支払いを行うことができるが、後者の場合には財産や地代のような収入の源泉を譲渡または蚕食せざるを得ないというスミスの考え方を継承しているといえよう。しかしながらシスモンディは、スミスのように貸し付けられた資金が生産的に使われた場合には、その資本額が回収されるといふ点の指摘にとどまらず、さらにその場合でも国富には何も付加されないと考え、むしろその点に主張の力点を置いているのである。

かくの如き互いに相殺される正の量と負の量の両面を持つという無形資本に関する第3の特徴に関連して、シスモンディは、信用は資金の貸し付けによって生じる無形資本を含めて、創造能力を持たずせいぜい富を移転させうるにすぎないという見解を提示している。これが、無形資本に関して『商業的富について』で指摘

されている第3の特徴である。シスモンディは、無形資本は「大会社の存在に結びつけられようと、あるいは政府の存在に結びつけられようと、決して信用創造の産物ではなく、物質的資本の引渡しや消費の産物なのである⁽¹⁶⁾」と述べ、さらに別の箇所では「我々が今述べたこと(無形資本には正負の量があり、それらはたがいに相殺されて国富には何も付加しないということ)によれば、信用は実際には創造的な能力をもっていない。信用は、それを占有する人に、すでに存在しすでに明らかに生産的労働を維持するのに用いられている富の一部分の処分権を与えるにすぎない⁽¹⁷⁾」と主張している。ここでシスモンディが無形資本に関して論述した特徴を、たんにそこにとどめず信用一般にまで敷衍している点は、やや論理に飛躍があると思われるかもしれない。しかしシスモンディは、『商業的富について』の段階では、銀行信用に関しても、そこにあるのは創造ではなく移転にすぎないと述べている。銀行は、たんなる媒介機関と捉えられているのである。だからシスモンディにとって信用は、それがいかなる形態をとろうと、創造性はないのである。しかしそれはともかく、資金の移転から生じた債権債務関係としての無形資本が創造能力をもっていないということは、立論上いわば当然のことといえよう。

以上、『商業的富について』における無形資本の概念を、大別して3点の特徴を通じてみてきた。これらに共通する性格は、第3の特徴点でも明瞭に表されているように、無形資本は何ら創造的ではないということである。シスモンディによれば、確かに無形資本は、他の商品と同様に譲渡されうるし、利子をもたらしものとして保持され、その貸し手である貨幣資本家にとっては資本として捉えられ、また機能する。しかし、他方で無形資本は、現に存在する物質的富の単なる移転によって生じた債権債務関係であるにすぎない。無形資本は資金の管理者を替えるだけだから、それは何も創造力をもっていないし、国富に新たに何かを付加するものでもないのである。

『商業的富について』におけるシスモンディのかくの如き論述には、スミスとの共通点が多い。もっとも

注(14) *ibid.*, pp. 175-176.

(15) Smith, *The Wealth of Nations*, ed. E. Cannan, I, p. 332. 第2編第4章(大内, 松川訳『諸国民の富』, 岩波文庫, 第2分冊, 374ページ。)

(16) Sismondi, *op. cit.*, p. 179.

(17) *ibid.*, p. 177.

そのことは、シスモンディ⁽¹⁸⁾自身がその初期の著作はスマイスの祖述だと述べていることから、当然のことともいえよう。とくに『商業的富について』で、信用を創造としてではなく移転として性格づける考え方は、まさにスマイスを受け継いだものである。

本節で検討した『商業的富について』と次節で扱う『経済学研究』の間で刊行された『経済学新原理』では、無形資本という概念はほとんど使われていない。ただ公債と関連して、資本還元による想像的資本が語られているだけである。

第2節 『経済学研究』における無形資本の概念

晩年におけるシスモンディの経済学に関する論文集である『経済学研究』では、最後の2論文、第16論文と第17論文が信用論の考察にあてられている。第16論文では貨幣と銀行が、第17論文では「無形資本すなわち債権」という表題のもとに無形資本が考察される。この第17論文における無形資本に関する論述には、第1節で扱った『商業的富について』で述べられている内容と一致する箇所もあるが、また前著の主張をさらに展開して新たな見解を付け加えた部分も多い。

『経済学研究』においてシスモンディが論じている無形資本の特徴は、大別して次の5点に整理される。それは、第1に無形資本は富者（資本家）の財産や企業の資本の中で大きな部分を占めているという点、第2にそれは正負の両面をもっているという点、第3にそれは本来富の移転にすぎないが、また創造能力をもっているかの如き幻想を懐かせるという点、第4にそれは流通が可能であるという点、そして第5に想像的資本についての諸点である。

まず第1に、シスモンディ⁽¹⁹⁾は、無形資本すなわち債権は、富者の資本や諸企業の資本の大きな構成部分に

なっていると、次のように指摘する。「債権は、商業界にいない人々の財産の中の一層重要な部分を形成している。心密かに計算してみると、人々は、如何に通貨が自分の財産の中のおずかな部分であるか、いかに債権がその中のかかなり大きな部分となっているかを知って驚くだろう⁽²⁰⁾」。またこれに続けてシスモンディは、「富者の財産目録の第1項目には、多分彼が所有する土地がはいっているだろう。次に多かれ少なかれ土地の価値に似ている他の不動産、鉱山、家屋、工場、そして産業に充用されるすべての固定資本がはいっているだろう。……すべての富者の財産目録の中で不動産の次に最も重要な項目は、ほとんどいつでも債権だろう⁽²¹⁾」と述べ、さらに別の箇所では「新規の製造業者の資金は、多分債権という形態ですでに彼の下に存在していただろう⁽²²⁾」と指摘して、その具体的形態として為替手形、長・短期の各種債務証券、株、公債などを挙げている。もちろん債権は、資本家といった個人の資本の場合にだけ、その中の大きな構成要素となるのではなく、視点を変えれば、企業の資本構成においてもその中の重要な成分となっているのである。この点をシスモンディは、「また商事会社において債権は、投下されている資本の中のかかなり大きな部分を成している⁽²³⁾」と指摘している。

ここで注目されることは、第1に債権すなわち無形資本が個人あるいは企業の資本の一成分と看做され、しかもそれが資本の中の大きな構成要素になっていると主張されている点であり、第2に債権すなわち無形資本が商業信用に基づく債権債務関係だけでなく、債券や株、公債など、さまざまな有価証券の形態をとった各種貸付けや出資によっても生じるものと規定されている点である。本稿第1節で扱った『商業的富について』では、無形資本は紙券通貨と異質のものであるということに主張の力点が置かれていたが、『経済学研究』においては無形資本が富者の資産の一部分であ

注(18) Sismondi, *Nouveaux Principes d'Economie Politique*, 1819, I, p. ii 省間訳『経済学新原理』, 世界古典文庫, (I) 27ページ。

(19) ここでシスモンディの言う富者が具体的に何を指しているかは、必ずしも明確ではない。この富者の資産内容からみれば、それは機能資本家を指しているようにも思える。しかしシスモンディは、後述の如く『経済学研究』の当該箇所の直前で、富者とは別に企業家の資金内容を言及しているのである。富者の財産目録の中には、本文で引用した項目の他に家具調度品やその他の奢侈品が挙げられている。シスモンディは、富者として、機能資本家や貨幣資本家を含む資本家一般や地主など、資金の貸し手を総称して述べていると推察される。

(20) Sismondi, *Etude sur l'Economie Politique*, tome II. (1838), p. 431.

(21) *ibid.*, pp. 431-32.

(22) *ibid.*, p. 429.

(23) *ibid.*, p. 430.

るという点が強調されている。⁽²⁴⁾ いわば無形資本が、富者の資産内容の検討を通じて、より信用諸関係の展開の中で捉えられるようになってきたといえよう。富者の資産や企業の資本の成分としての、株や公債をも含む無形資本の背後には、紙券通貨の発行といった銀行信用だけでなく、ある程度発達した資本市場が考えられるからである。

『経済学研究』において指摘されている無形資本すなわち債権の第2の特徴は、無形資本は個人にとっては資本としていわばその富に対して正の量になりえても、その裏には債務という負の量があって、一国全体としてみれば無形資本は国富に何も付加しないという点である。シスモンディは、次の如く主張する。「我々は、一国の貸借対照表を作成しようと努めてきたが、どうして国民に対する債権を貸借対照表に入れることができようか？ 国民は、一方の債務によって貧乏でもあるし他方の債権によって裕福でもあるということとは明白ではないのだろうか？ 債権は、相殺し合う肯定的かつ否定的な二つの等しい量である⁽²⁵⁾と考えることはできないのだろうか？」。債権すなわち無形資本は国富に何も付加しないというこの主張は、前節で扱った『商業的富について』におけるその繰返しである。しかしながら『経済学研究』においてシスモンディは、債権を、たんに正負両面によってたがいに相殺されるものとしてばかりでなく、むしろ国富にとってマイナス要因になりうるものとして捉えている。「債権をもっと良く調べてみると、人々の驚きを倍加させる別の事情が再認識されるだろう。そして我々は、どうして債権が国富の一部となるのかということの理解を一層困難にさせられる。肯定的な量がなくなっているのに否定的な量が残存し、したがって債権が何かブラ

スのものではなく何かマイナスのものに、すなわち国富から差し引かれるものになるということが、頻繁に起きるのである⁽²⁶⁾。「肯定的および否定的な二つの量は、ひとたび分割されると、たがいに完全に独立したものとなる。貸し付けられた資本は、有効に有益に用いられる⁽²⁷⁾し、国富の増大に貢献することができる。また貸し付けられた資本は、誤った投機や資沢や常軌の逸脱で消滅されることもありうる。作られた債権は、それでもなお元のまま残っている。人々がそれを返済するべくあてにしたのは、この〔借用したのと〕同じ金⁽²⁸⁾ではなくて、他の場所で得た別の富である。しかし国民にとってこの両者の仮定の間には相違がある。第1の場合には、貸し手は彼が譲渡した資本に等しい債権をもっているし、借り手は流動資本をもっていてその価値を返済する義務を負っている。これは、たがいに相殺される肯定的および否定的な二つの量である。従って国民は損もしないし得もしなかった。第2の場合には、貸し手は移転した資本に等しい債権を保持している。したがって彼は、損もしなければ得もしない。借り手は、もはや流動資本をもっていない。彼は負債を背負ったままである。したがって彼は、ちょうどこの〔資本〕量だけ貧乏であり、また国民は、空しく貸付けられたこの〔資本〕量だけ貧乏である⁽²⁸⁾。かくの如く述べられたシスモンディの主張の力点は、『経済学研究』において新たに論述が加えられたこの無形資本の国富に対するマイナス面に置かれていたようにも思われる。すくなくとも無形資本は、それ自体としては国富に付加されるものではないと考えられているのである。

『経済学研究』で債権すなわち無形資本の特徴に関連して述べられている第3の議論は、無形資本の概念

注(24) もっとも、『経済学研究』においても債権と貨幣(monnaie)の異質性が述べられている。しかし、その論述は前著ほど念入りではない。ただ『経済学研究』では、資本家は流通に必要な貨幣を銀行に預け、すべての勘定をサインで済ませるから資本家の手元には貨幣はわずかしかないという指摘が付加されている。債権すなわち無形資本と貨幣との異質性の論拠が、一国内に存在する債権額と貨幣とのたんなる量的比較から、銀行信用を媒介とする資本家の資産内容へと転換した点が注目される。

(25) Sismondi, *op. cit.*, p. 439.

(26) *loc. cit.*

(27) ここでシスモンディは、貸し付けられた資本は有効に使用されれば国富の増大に貢献しうると述べている。しかしこの意味は、貸し付けられた資本が貸し付けられる前と比較してより多くの富を生産したとか、あるいは富を生まない遊休資本が信用の媒介によって国富を増大させたということではなく、せいぜい国富を減少させないということであるにすぎない。本文の引用でもみられるように、この論述の直後にシスモンディは、貸し付けられた資本が有効に使用された場合でも債権と債務はたがいに相殺されて、国家は損も得もしないと述べているからである。この点は前著における主張と変っていない。

(28) Sismondi, *op. cit.*, pp. 440-441.

を含む信用の役割を資本のたんなる移転とみるか、あるいは資本の創造とみるかという問題である。シスモンディは、「信用の現実の機能は、他方に所属するものの処分をたんに一方に移転することであるにすぎない」と述べて信用の創造性を否定する。この点は、すでに『商業的富について』でも指摘されていた。しかしながら『経済学研究』においてシスモンディは、他方で信用の創造能力を認める記述も残しているのである。信用の機能は移転にすぎないという前記の引用文に続いて、シスモンディは、次のように主張する。

「しかし、我々が用いる方法では、信用は、まだ生まれていない人々に所属するものの処分を、正しくは彼らにのみ所属するものすなわち彼等の労働の処分を、我々に移転するのである。これを基礎に信用は、一国民の現実の繁栄に何も付加せず、またしばしば一国民にとって破滅の大きな原因となるが、しかしそれを占有する人々に実際に豪華を極めさせ、同時に実在する価値の2倍の価値を商業にもたらす巨大な財産を創造したのである。どの身体もその影を将来に投影したといわれ、その影はその身体と全く同様に買取できるものになるといわれる。この幻想的な創造は、どんな収入も資本に結びつけて考える我々の習慣の結果なのである」。

このあとシスモンディは、資本還元について述べ、さらに政府がその台帳に50エキュの金利を支払うと書き込むだけで、実際には何も受け取っていないくても政府は1,000エキュの資本を創造することになるだろうと指摘し、次のように続けている。

「政府は国民を裕福にするだろうか？ 明らかにちがう。しかしながら政府は、取引所で換価流用可能資産 (les valeurs disponibles) を増加させ、株式仲買人や銀行家の取引に新たな活力を与えるだろうし、資本家にカネ (argent) の新たな投資〔部面〕を提供するだろう。だから創造はあるが、信用に結びつけられた幻想的な創造があるのである」。

ここには2つの論点が含まれている。その第1は、

信用の機能は資本の移転であるのかそれとも創造なのかという点、第2は、信用の機能が部分的には創造だとしてもそれは幻想的なものにすぎないという点である。第1にシスモンディによれば、信用は、一国民全体にとっては移転の機能を営むにすぎないが、個人とか商業部面のように個別的・局部的にみれば巨大な財産を創造する。確かに前著においても、個別資本家としての貸し手にとって無形資本は、肯定的な資本になると述べられていた。しかしその論述は、あくまでも実在する資本との交換によってその貸し手に生じた資本という意味であり、すなわち移転に力点が置かれていたのであって、創造と表現されるほど強い意味はなかった。『経済学研究』で限定付きとはいえ信用の創造的な機能が認められている点が注目される。しかし、この限定も無視されるべきではない。先の引用文の第2の論点として、シスモンディは、信用の創造的な機能は幻想的なものであるにすぎないと主張する。ここで幻想的という意味は、二重に用いられている。一方では信用の創造能力は資本還元という習慣によるものと捉えられており、したがって幻想的という意味は、実体が何もない架空のものということである。しかし他方でシスモンディは、「貸し付けられた資本とは別に貸し手に担保の役目を果たすべき富とは何か？ 実在する資本と債権との等価交換をもたらした価値はどこに見い出されるのか？ ここで我々は、信用の能力には確かに創造者 (créateur) がいるということを認識しはじめる。信用の能力は将来を処分する。それは過去との交換で将来を与える」と述べている。この論述でもまた前掲の引用文でもみられるように、幻想的という意味は、創造された資本が全く架空というわけではないが、それが労働生産物の実体を獲得するのは将来においてであり、現時点ではやはり架空のものにすぎないということでもある。このように『経済学研究』においてシスモンディは、一方で信用の創造的な機能を否定しつつ、他方ではそれを幻想的または架空だという限定付きとはいえ認めているのである。

注(29) *ibid.*, pp. 446-47.

(30) ここでシスモンディが実在する価値の2倍の価値を商業にもたらすと言っている意味は、本文における次の引用文で明らかなように、生産過程で生産される商品価値が倍化されるということではなく、株式仲買人や銀行家の取引対象である貨幣や各種有価証券あるいはそれらの形態をとった貨幣資本が貨幣市場や資本市場で増加するということである。

(31) Sismondi, *op. cit.*, p. 447.

(32) *ibid.*, p. 448.

(33) *ibid.*, p. 441.

(34) 信用の機能を一面で移転と主張し他面で創造と捉えるような二律背反的思考方を、『経済学研究』においてシスモンディは、この点に限らず別の箇所でも展開している。シスモンディにとって一方は規範、他方は実態であり、その両者が矛盾しているのである。

信用の機能を一貫して移転と主張していた『商業的富について』に比べると『経済学研究』におけるこの点の論述は、大きく変化しているといえよう。

『経済学研究』においてシスモンディが指摘する債権すなわち無形資本の第4の特徴点は、債権自体の流通可能性である。この点は、上述の債権に関する第3の特徴点で引用した⁽³⁵⁾論述の中の、政府は架空の資本の創造によって株式仲買人や銀行家の取引量を増大させたとの指摘によってすでに示唆されているが、別の箇所でもシスモンディは、この点に関して次の如く述べている。「借り手は、しばしば永続的な賃料を提供するという約束だけをする。資本は現実には永久になくなっている。ただ資本が商業に通常もたらす利子によって、年金の生じる仮定的な資本が支払い者の手中に想定されているのである。もしこの年金が定期的に提供されれば、熱心にそれを得ようとする資本家のだれかがつねに見出されるのであり、彼は前の資本家にとって代ることに同意する。このようにして、国民が決して返済しなくても債権は維持されるのである⁽³⁶⁾」。このようにシスモンディは、資本還元によって生じる架空の資本が、定期的にもたらされる利子を根拠にして資本家から資本家へと移転されると指摘する。このことは、次の想像的資本と密接に関連している。

債権すなわち無形資本に関する第5の特徴は、資本還元が行なわれ、同時にそれによって想像的資本という一特殊形態が生み出されるという点である。資本還元に関しては既述の引用文にもみられたが、その他にもシスモンディは、折にふれてそのことを述べている。「商業のためにゆがんだ習慣によれば、すべての利子は資本を想定する。……もし商業界の利率が20分の1すなわち5%ならば、信用は、約束された賃料の20倍の無形資本を創造し、それを貨幣と交換に貸付資本に与える。これが将来の資本化であり、まだ生まれていない生産物、多分決して生まれない生産物の前払い⁽³⁷⁾である」。[1,000エキュエを貸した人は、この1,000エキ

ューの享楽の代りに借り手が貸し手に毎年50エキュエを支払うことで借り手と意見が一致している。この最初の契約は、50エキュエの収入が見出されるころはどこでもそれを生む1,000エキュエの資本がどこかにあると考えるのを常としている。50エキュエで貸貸されている土地は1,000エキュエの価値があると見積もられ、政府による50エキュエの永久年金も同様に見積もられる⁽³⁸⁾。さらにシスモンディは、次のように述べている。「資本と利子との間の慣習的な関係は、資本が見出されるころはどこでも利子が期待され、また人々が利子に出会うところはどこでも人々は資本を想定するということをひき起す。そしてしばしば人々は、実在の資本と全く同様に、商業において想像的資本を創造するのである⁽³⁹⁾」。すなわちシスモンディは、規則的に支払われる利子の背後に、その利子を利子率で割って得られた資本が存在していると看做すいわゆる資本還元を説き、その結果生まれた資本を想像的資本⁽⁴⁰⁾(capital imaginaire)と呼んでいるのである。この想像的資本は、一面では上述の無形資本と明らかに異なっている。すなわちここまでの叙述における無形資本は、一定額の資本の貸し付けによって貸し手に生じた債権であり、この場合貸し付け額は与件である。しかし想像的資本においては、たとえそれが形成された契機が資本の貸し付けであったとしても、その額は利子と利子率によって変化する。他面では無形資本と想像的資本の間には共通点もある。例えば両者とも債権債務関係を基礎にしているし、資本としての権利を譲渡することも可能である。資本還元が論述された際に「約束された利子の20倍無形資本が創造される」と述べられていることから明らかなように、シスモンディは、無形資本と想像的資本を全く異質のものとは捉えていなかった。むしろシスモンディは、後者を前者の一特殊形態と考えていたと思われる。無形資本は、目に見える物的な形態としては何も実在しない諸資本の総称なのである。そのことは、想像的資本に関する

注(35) 注(32)の引用文参照。

(36) Sismondi, *op. cit.*, p. 445.

(37) *ibid.*, p. 442. なお、同様の指摘は、ヒルファーディングでも見られる。R. Hilferding, *Das Finanzkapital—Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*, 1910, (邦訳、岡崎次郎訳『金融資本論』岩波文庫版、上)第2篇第7章参照。

(38) Sismondi, *op. cit.*, p. 447.

(39) *ibid.*, p. 427.

(40) 周知の如く、スミスも『諸国民の富』の中で資本還元について触れている(Smith, *The Wealth of Nations*, ed. E. Cannan, I, p. 339. 前掲邦訳書、第2分冊、388-389ページ)。しかし、そこでは土地価格に関してのみ述べられているのであって、シスモンディの資本還元に関する論述とスミスのそれとは、質的に異なっている。

叙述が『経済学研究』の「債権すなわち無形資本」という表題のついた最終章の中で展開されていることから窺える。これとともに他方で想像的資本は、シスモンディの意識とは別に、無形資本のひとつの帰結であるともいえよう。実在する貨幣資本の貸し付けによって貸し手に生じた無形の資本という素朴な形態から、資本還元によって実在する資本から切り離され、また架空のものでありながら取引所などで売買される想像的資本への無形資本の展開は、歴史的にも論理的にも発展過程と捉えることができ、また想像的資本は無形資本のひとつの完成形態と考えられるからである。かくの如き想像的資本は、前者では論じられていない。ここに『商業的富について』と『経済学研究』との間の大きな相違あるいは発展がみられるのである。

以上大別して5点が、『経済学研究』において述べられている債権すなわち無形資本の特徴である。

ところでシスモンディは、債権が発生する契機を信用販売と貸し付けにもとめている。「[通常の]販売において、商品は、それと引き換えにすべての商品を手に入れられる手段、すなわち貨幣と交換に与えられる。信用販売において、商品は、貨幣がやや遅れて与えられるであろうというだけの約束と交換に与えられる。貸付において、貨幣は、それと等額の貨幣がやや遅れて返されるだろうという約束と交換に与えられる。信用販売と貸し付けは二種の債権を構成している⁽⁴¹⁾」。したがって、債権すなわち無形資本は、商業信用と銀行信用の両者を基礎にしているのである。しかし同時に無形資本は、その両者を超える部分もある。シスモンディは、債権すなわち無形資本の具体的形態を次の如く述べている。「債権は、取引上の為替手形を含む有価証券だったり、これは一定期限付の短期債権だが、あるいはそれは、銀行家における当座勘定 (compte courant)、債権者が強く要求したときに実現される取引上の債権だった。それは、長期の確定期限付きでのみ実現されるにすぎない抵当、不動産に対する債権であるかもしれない。それは、運河や鉱山や銀行の株すなわちそれ自身商事会社を作り、実現はされないがその所持者が別の所持者に譲ったり売却したりできる、会社に対する債権かもしれない。最後にそれは、公債すなわち通常会社の株と同様に実現はされないが債権者がその資本を回収するために別の債権者に売却する、

⁽⁴²⁾どこかの国の政府に対する債権かもしれない。『商業的富について』においては無形資本の具体的形態として抵当付き債権、預金手形、現金勘定などが挙げられるだけであった。しかし『経済学研究』では株や国債が含まれ、その内容が拡大されているのである。しかも株や国債は、前述の如き株式仲買人やまたその取引所を前提としているのであって、無形資本は、商業信用や銀行信用という枠を超えた資本市場までも包括しているといえよう。

小 括

以上シスモンディの無形資本に関する叙述を考察してきたが、すでに明らかのように、シスモンディによる無形資本の概念の主要な特徴点は、次の3点である。その第1は、極めて限定された意味においてであるが無形資本(および無形資本を含む信用一般)は資本を創造するという点である。シスモンディは、本来商品や貨幣がいの現実的実体のないものは富ではないと考える。債権は、個別資本家にとっては資本となりえても、その背後にある債務とたがいに相殺され、国富には何も付加しない。だからそこには当初から存在し貸し付けられた資本しかなく、信用は移転にすぎないと初期のシスモンディは主張していた。しかし晩年のシスモンディは、その主観的意図はともかく、資本市場における取引や資本還元の慣習を通じて次第に信用の創造性を認めるようになったのである。彼にとって信用による資本の創造は、規範と矛盾するひとつの実態だったのである。

これに関連してシスモンディは、資本還元によって得られる資本を想像的資本と呼び、無形資本の一特殊形態として論じている。これが第2の特徴点である。ここにおける信用は、すでに移転という枠を明白に超えている。想像的資本は、その根拠となった利子以外に何も実体をもっていないからである。

しかし第3に、シスモンディ自身は、信用の創造的な機能を主観的には認めようとしなない。信用による資本の創造を幻想だと主張する彼は、創造されたかに見えた資本は将来の労働の成果の先取りであり、子孫はその労働の一部を過去の債務のために支払うという負担を強いられると述べている。むしろ貸し付けら

注(41) Sismondi, *op. cit.*, p. 440.

(42) *ibid.*, pp. 429-30.

れた資本が浪費されれば、その分だけ以前よりマイナスになってしまう。シスモンディの主張の力点は、ここにある。「我々の考えるところでは、無形資本の本性を認識させること、現在よりも将来の世代を犠牲にする借り入れの欺瞞と不正を特筆すること、信用の創造能力に対するすべての信頼を消すこと、そして絶対に必要な場合を除いて、名誉ある国家のすべての人々を破滅⁽⁴³⁾させる術策に頼るのを妨げることは有意義である」。

シスモンディがかくの如く無形資本あるいは信用を否定的に捉えたのは、自分自身の恐慌などの経験とともに、貸し付けられた資本が生産過程にいかにかかわるかという信用と再生産との関連の問題を十分理論的に展開しえなかったからであろう。ここには三つの問題点が含まれているように思われる。第1にシスモンディは、証券取引などの市場そのものやそこにおける慣行を直視したのだが、逆にそこでのいわば表面的現象にとらわれていたと言わざるを得ない。第2に確かにマルクスは、「確定した規則的な貨幣収入は、……すべて資本の利子として現れ」、「その利子の源泉となる資本も見い出される」とはいえ、「このようなこと

は、……純粋に幻想的な観念⁽⁴⁴⁾である」と述べているが、しかし他方でマルクスは、それをたんに架空資本と規定するにとどめず、銀行資本の一成分として把握することによって、その架空資本を再生産との関連で位置づけていたのである。これに対してシスモンディは、無形資本の幻想的性格を強調したにすぎず、せいぜい無形資本を資本家の富あるいは企業の資産の一部と指摘するだけで、その銀行資本との関係を何ら認識していないのである。したがって第3に、シスモンディは、想像的資本において端的に表われているように無形資本の架空性をそれが実体を伴わないという点でのみ捉えているにすぎず、たとえば銀行における振替によって資本が2倍、3倍になりうるという生産拡大の契機としては理解しえていないといえよう。

しかし、このような欠陥を含みながらもシスモンディの無形資本の概念は、信用の機能をたんなる資本の移転の媒介とする認識の枠を越え、マルクスの擬制資本の概念⁽⁴⁵⁾を導出するものとして、学説史上重要な意味をもつものであるといえよう。

(慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程)

注(43) *ibid.*, p. 464.

(44) Marx, *Das Kapital, Werke* Bd. 25, ss. 482-83. 前掲邦訳書、第25巻第2分冊、594-95ページ。

(45) この点に関しては、拙稿「シスモンディの信用論——銀行信用を中心として——」(『三田学会雑誌』第71巻第5号、1978年10月)を参照。